

あくま にんぎょう 悪魔の人形

あるところに、古くて大きな家があった。10年くらい前まで、その家には、大
がねも かぞく す
金持ちの家族が住んでいた。でも、ある日、泥棒がその家に入り、その家のお金
ほうせき ぬす
や宝石をすべて盗んだうえに、家族を全員殺してしまったらしい。本当か嘘かは、
わからない。でも、ぼくのおじいちゃんが、そう言っていた。おじいちゃんは、
ひく
低くてこわい声でゆっくりその話をしたから、ぼくはほとんど泣きそうになっ
てしまったけど、なんとかがまんした。

いま、その家には誰も住んでいない。家の中は昼でも真っ暗で、窓ガラスは、と
ころどころ割れている。庭は草がぼうぼうで、ときどき、黒い猫やカラスが
ぶきみ こえ な
不気味な声で鳴いている。ぼくたち小学生は、その家を「悪魔の家」と呼んで
いる。

なつやす
夏休みのある日、タケルがぼくに言った。

「聞いた？ アキが言っていたんだけど、昨日の夜、『悪魔の家』から叫び声が
き
聞こえたんだって。」

タケルもアキも、同じクラスの友だちだ。

ぼくは、そんなの全然怖くないというふりをしながら、こう言った。

「へえ。ぼくもあの家で、叫び声を聞いたことあるよ。」

これは嘘だ。ぼくは、おじいちゃんの話^{はなし}を聞いてからは、絶対に「悪魔の家」^{あくま いえ}に近づかないようにしていた。

タケルは

「今日の夜、ふたりであの家^{いえ}に行ってみようぜ。」

と言った。

ぼくは、ついつい、

「いいね、行こう、行こう。」

と言ってしまったが、心^{こころ}の中^{なか}では（やばい、どうしよう）とおもっていた。

夕方^{ゆうがた}、タケルがぼくの家^{いえ}に来た。ぼくは、お父さん^{とう}とお母さん^{かあ}に

「みんなと公園^{こうえん}で花火^{はなび}してくる。タケルのお父さん^{とう}もいっしょにいるから大丈夫^{だいじょうぶ}。」

と言って、家^{いえ}を出た。もちろん、これも嘘^{うそ}だ。

「悪魔の家」^{あくま いえ}へ向かう途中^{む とちゅう}、タケルはずっと興奮^{こうふん}していた。

「悪魔^{あくま}って、マジでいるのかな？ マジでいたら、どうする？」

ぼくは、

「いるわけないじゃん。」

と言いいながら笑わらった。笑わらったつもりだったけど、心こころの中なかでは(やばい、やばい、
どうしよう、こわい)と思おもっていたから、うまく笑わらえなかったかもしれない。

タケルは早はやくちで、いろいろしゃべっていた。ぼくは、ほとんど聞きいていなかった。
そして、気きづいたら、ぼくたちは「悪あく魔まの家いえ」の入り口いぐちにいた。あたりはすっか
り暗くらくなっていた。

タケルが「悪あく魔まの家いえ」のドアひを引く。ぎいーという不ふ気き味みな音おとが鳴なって、ドア
が静しずかに開ひらく。家いえの中なかは真まっ暗くらだ。がさがさとおと音がして、何なにか小ちいさな物ものが動うごく。
ねずみか、ねこか。

タケルが

「うわっ！」

と叫さけぶ。

ぼくも

「なに!? なに!？」

と叫さけんで、タケルの服ふくをつかむ。

「あー、なんだ、くもの巣か。」

タケルが言う。暗くてよく見えないが、どうやら、家の中はくもの巣だらけのようだ。

「うわっ！」

今度はぼくが叫ぶ。タケルも

「なに!? なに!？」

と叫んで、ぼくの服をつかむ。足もとに何かある。何かを踏んでしまった。窓から月の光が入ってきて、少しずつ周りが見えるようになる。ぼくが踏んでしまった物は人形だ。古い人形の目が、ぼくを見ている。

よく見ると、その家の中には、不気味な古い人形がたくさん並んでいる。しかも、月の光で、人形たちの目が光っている。

タケルが言った。

「な、なんか、こいつら、おれらを見てない？ まさか、生きてる？」

ぼくは、怖くて怖くて

「もう帰ろうよ。」

と言った。そのとき、タケルが言った。

あくま にんぎょう
「悪魔の人形！」

ぼくは、その場から逃げ出した。後ろを見ないで、とにかく自分の家まで必死に走った。家の前で止まると、後ろからタケルが追いかけてきた。ぼくもタケルも汗だくになっていた。

「どうしたんだよ。急に走り出すから、びっくりしたじゃん。」

タケルが言った。ぼくは、たくさん走ったのと、まだ怖いので、うまく返事をする事ができなかった。タケルは怖くなかったのかな。

タケルは興奮して話し続けた。

「でも、ちょっと怖かったなあ。古い人形が全部、こっち見てる感じがして。まあ、でも、1つだけ、かわいい人形があって、なんだこれ？ って感じだったよな。なんか、ウケた。」

かわいい人形？ 何のことだろう。

タケルが続ける。

「でも、おれが笑いながら『くまの人形！』って言ったとたんに、おまえ、逃げちゃったじゃん。どうしたの？」

ぼくは^{あたま なか かんが}頭の中で考えた。^{あくま にんぎょう}悪魔の人形……^{あくま にんぎょう}あくまの人形……。あ！

ぼくは

「いや、別に……。そろそろ、家に帰らないと、お母さんに怒られると思って。

だから急いで帰っただけ。」

と言った。もちろん、これも嘘だ。

夏休みが終わって、^{しょうがっこう}小学校がはじまった。タケルとぼくは「^{あくま いえ}悪魔の家」に行っ

たことを、クラスみんなに^{じまん}自慢した。

ぼくは言った。

「あの家には、^{ふる にんぎょう}古い人形がいっぱい並んでたよ。」

タケルが^{つづ}続けて言った。

「で、^{にんぎょう め ぜんぶ ひか}人形の目が全部光って、おれらを見てた。」

「めっちゃ^{こわ}怖かったよな。」

「そうそう。しかもその^{にんぎょう}人形が、^{すこ}少しずつ^{うご}動いて……。」

ぼくたち二人の^{ふたり はなし}話は、^{とちゅう}途中から^{うそ}嘘になった。どこからが嘘なのかは、二人だけ
の^{ひみつ}秘密だ。

そして、ぼくが「^{にんぎょう}くまの人形」で^{に だ}逃げ出したことは、ぼく一人だけの^{ひとり ひみつ}秘密だ。

(1999^下字)

(2022.1 Written by Junko SATO)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.